
ALEXANDER
POPE

矢野禾積

1964

東京 研 究 社 出 版

ポ ー プ

¥250.



KENKYUSHA

新英米文学
評傳叢書

昭和 30 年 8 月 15 日 印 刷
昭和 30 年 8 月 20 日 発 行
昭和 39 年 10 月 20 日 三版発行

著 者 矢 野 禾 積

発 行 者 小 酒 井 益 藏

東京都千代田区富士見町 2 / 1

印 刷 所 研 究 社 印 刷 株 式 会 社

東京都新宿区神楽坂 1 / 2

発 行 所 研 究 社 出 版 株 式 会 社

東京都千代田区富士見町 2 / 1
振替口座 東京 83761 番

は し が き

このポーブ評傳は、もと英米文學叢書のポーブ詩選の序文たらしめるつもりで起稿したのであるが、進行中段々紙幅を加へ來つたので、遂に中途から獨立させる事に方針を變へたのである。といふのは、ポーブの作品を理解しその妙味を味はふためには、何としても彼の時代の文壇の情勢や社會狀態、特に彼を繞る人々との交游關係を相當明にする必要があるからである。従つて、本書は、あのやうな作品を産むに至つた彼の性格と環境との説明に主眼を置き、個々の作品に關する説明は、二三のもの以外は、すべて従とした。その例外の中には *Ellegy to an Unfortunate Lady* や *Dunciad* が含まれて居る。前者に關してはポーブ在世の頃から様々の臆説が行はれて居たが、最近に至り、種々の方面から推測して殆ど決定的とも言ふべき解釋が現れたので、それを紹介する事とした。また『ダンシヤッド』は、一大諷刺詩

として有名であるにかかはらず、その長篇であるためと、更にその中に登場する大小の人物に關する知識の不足の故に、全篇の通讀される機會の意外に少い作品であるので、その成立の次第と梗概とを一通り説く事とした。また、*The Narrative of Dr. Robert Norris, Concerning the strange and deplorable Frenzy of Mr. John Denn . . .* は、ポープ執筆の怪文書とも言ふべきもの、最近その翻刻も出たが、我國に於ては今尙稀觀書に屬せるもの、當時の文壇の裏面を窺ふ上に好個の資料たるを失はない。

その他ポープの詩を理解する上に必要な彼の用語、例へば“Wit” “Nature” “Dunce” “Duiness” などの如きものに對する二三の考察を試みておいた事も附記すべきであらう。また、詳説するだけの紙幅が無かったので割愛したが、ポープを一概に擬古主義の詩人・批評家と爲す古い見方が、必ずしも真相に觸れたものでない事を指摘して置いた事も、本書の一特色と言へよう。

最後に、本稿執筆に當つては、主としてポープの書簡、Spence の *Anecdote* なよび Sharnburn の *The Early Career of Alexander Pope* によつた。唯、前二者を採用する場合には、能

ふかぎり傍證によりその眞實性を確める事に努めた。蓋し、ポーブの書簡は、紛れも無く彼自筆のものであるにもかかわらず、後年彼の手によって改竄されたるもの少からず、また、スペンスの傳ふる所は彼の直話の忠實なる筆記であるにかかはらず、その根據たるポーブの言葉が、彼一流の *affectation* により、必ずしも眞實を語れるものでないからである。

本書は片々たる冊子ではあるが、如上諸種の理由により、一つの新しいポーブ研究としてわが讀書子に多少の參考資料を提供し得るであらう。唯、これを繙かる人は、前記ポーブ詩選を座右に備へられん事を望む。

本書は『ポーブ詩選』と同様、著者が臺灣に於て書き上げた最後のものである。従つて、これは、『詩選』の直後公にする事になつて居たにもかかはらず、身邊の事情に妨げられて推敲改竄の機無く、徒らに荏苒數年を閲し、其間、曾ては「一九四九年八月、洛西嵯峨落柿舎裏にて」と附記した序を「一九五二年五月下旬、東都目黒の假寓にて」と改めたが、今や更に「一九五四年七月中旬、東都武藏野の假寓にて」と改めざるを得ざるに至つた。然し、す

べては、紙幅伸縮の必要に迫られての改稿に過ぎず、何等核心的なものには關しない。今漸くこれを剝削に附さんとするに當り、曾てポーブが『ダンシヤッド』の序に於てその脱稿に十二年を費したと嘆じた、あの嘆聲に似たものを、私も亦洩らさざるを得ないのである。

昭和二十九年七月中旬

著 者

目次

はしがき	．．．．．	vii
一、生ひたち	．．．．．	一
二、批評論	．．．．．	二五
三、雌伏時代	．．．．．	五七
四、デニス發狂顛末記	．．．．．	六四
五、スクリブリアラス・クラブ	．．．．．	八五
六、髮盜人	．．．．．	九一
七、抒情詩人ポープ	．．．．．	一〇一
八、イリヤッド	．．．．．	一一七

九、	『シエイクスピア全集』と『オデッシー』	一三〇
十〇、	造園	一四一
十一、	ダンシャッド	一四八
十二、	『人間論』その他	一八五
十三、	生涯と性格	二〇四
十四、	諷刺論	二〇八
十五、	英詩史上のポープの位置	二三五
年表	卷末	1
書誌		4
索引		8

一生ひたち

アレグザンダー・ポープ (Alexander Pope) は一六八八年五月二十一日ロンドンに生れた。ロンバード街 (Lombard Street) に住みリネン商を営んで居た同名の父と、その後妻イーディス・ターナー (Edith Turner) との間に儲けられた一人息子で、時に父母共に四十六歳であった。家には九歳上なる、先妻の忘れがたみマグダレン (Magdalen) が一人居た。後にミセス・ラケット (Mrs. Rackett) として、ポープの書簡に時折顔を出すのは、此の異母姉の事である。ポープ傳の筆者に「資料の庫」を提供したジョーゼフ・スペンス (Joseph Spence, 1699-1768) に對し、この姉が後年語ったところによると、ポープは三歳の頃、「小さい車 (cart) に石を積んで遊んで居た時、牝牛が彼にぶつかり、帽子と羽毛飾りとを角に引っかけ、彼をば今迄その側で遊んで居た石山の上に投げつけた。投げ飛ばされる時、彼は石で、咽喉に近

い頸部を切った。これは、彼に、ひどい衝撃を與へたに相違あるまいが、そのため不具になるやうなことは無かった。

大人になつても身長僅に四呎六時に過ぎず、僂僂で、大人の間に伍すと、まるで玩具(Toy)のやうに見へたといふポーブの畸形は、彼の生涯と作品とに絶大な影響を與へたもので、ポーブと言へば必ず僂僂を聯想させ、はては、彼は生來の不具者であつたかとさへ速斷され易いのであるが、事實は然らず、十歳頃迄の彼は、其頃描かれた彼の肖像面に見られるやうに、まるまるとふくやかな顔立の、血色も生々とした少年であつた。上記スペンスが神父マノック(Mannock)から聞いた話として傳へるところによると、ポーブがあのような僂僂になつたのは、十二歳の頃から、たえ間無く勉強に凝るやうになつたためである。性質も柔和で、特に聲の美しいところから“little nightingale”と呼ばれて居たとのことであるから、可愛らしい小供であつたに相違無い。

十二歳頃と言へば、ポーブがウィンザー(Windsor)に近スピンフィールド(Binfield)に移つた時のことである。それ迄のポーブは、自分の家で、クリスティーナ(Christina)と呼

ぶ伯母——母の姉で、畫家サミュエル・クーパー(Samuel Cooper)に嫁した人——から、讀方を教はったり、印刷本を手本にして書方を習ったりして居たが、八歳の頃にはカトリックの僧侶で家庭出入の牧師だったウィリアム・バニスター(William Bannister)に就き、ギリシア語やラテン語を學び、一年の後には、ウィンチェスター(Winchester)に近いツッイフォード(Twyford)のカトリック教徒學校に移った。教師に對する諷刺詩を書いたため鞭打られたり虐待されたりしたといふのは、此の學校在學中のことであるから、ポーブが詩才に恵まれ、早くより詩筆を弄してゐたことは明らかである。さうした事情から、この學校も去らねばならなくなり、次に入學したのはトマス・ディーン(Thomas Deane)といふ人の經營せる、ロンドンはいド・パーク・コーナー(Hyde Park Corner)の學校であつたが、ポーブがスペンスに語ったところによると、彼はこの二つの學校で、むかしバニスターから學んだものを全部忘れてしまったとのことである。

ポーブが受けた學校教育といふものはこれだけに止り、まことに「微少散漫」(slight and desultory)なもので、餘はすべて獨學自習によるものである。もっとも、一七〇〇年ピンフィ

ールドに移った後、一度、或る牧師に就いて教を受けたことがあるが、それも數個月の後はやめてしまったのである。斯くて、ペンフィールドのポーブは、自由勝手に好きな書物を讀むことを許されたらしいが、如何に彼が勉強したかは、姉がスペンスに向つて、「妾は青年時代の弟ほど勉強した人は他に無いと信じてゐます。彼は読み書き以外は何一つしませんでした。」と語つて居るのでも分るが、ポーブ自身もまた當時の熱心な亂讀ぶりを、やはりスペンスに向つて次のように傳へて居る。

“When I had done with my priests, I took to reading by myself, for which I had a very great eagerness and enthusiasm, especially for poetry : and in a few years I had dipped into a great number of the English, French, Italian, Latin, and Greek poets. This I did without any design but that of pleasing myself ; and got the languages by hunting after the stories in the several poets I read, rather than read the books to get the languages. I followed everywhere as my fancy led me, and was like a boy gathering flowers in the fields and woods, just as they fall in his way. These five or six years I still look upon as the happiest part of my life.

（牧師たちと絶縁してからは、獨りで讀書を始めた。讀書、特に詩に對しては、以前から非常に大なる切望と熱望とを懷いて居たのである。かくて數年の間に、私は多數の英・佛・伊・羅・希・詩人を覗いたのであるが、これは興味本位といふ以外何等の目的あつてやった事ではない。さうして、私の場合では、外國語を學ぶために書物を讀むといふよりも、自分の讀んだ様々の詩人に物語を求める事によつて外國語を習得したのである。私は氣の向くが儘に何處にでも趣く事、まるで子供が自分の行手に見出すが儘に森でも野でも花を摘むに似てゐた。私は今でも、この五六年間を、自分の生涯における最も幸福な時代と考へて居る。）

斯うして手當り次第に讀書しながら、好きな章句に出あふと、これを模倣したり翻譯したりするのが常であつた。後年彼が公にした多くの英・羅詩人に倣へるいはゆる *Imitations* 成立の遠因は、實に茲に存するのである。當時彼の愛讀した詩人は、スペンサー (Edmund Spenser, 1552-99)、“ドライデン (John Dryden, 1631-1700)” ウォラー (Edmund Waller, 1606-87) 等であつた。

ち　　た　　ひ　　生
ポーブがドライデン崇拜の餘、一友に迫つて、その宿坊なるコーヒー店ウィル亭 (Will's Coffee-House) に伴なはしめ、今を時めく文壇の大御所を一目垣間見たといふ話は、詩人自

ら後年語る所に従へば、彼がまだハイド・パーク・コーナーに住んで居た十二歳の事である。然し、ボープが十二歳の時と言へば一七〇〇年頃の事で、彼がピンフィールドに移轉した年に當るのみならずドライデンはその四月（嚴密に言へば五月一日午前三時）に歿して居り、既に前年の終頃から病褥に親しみがちで、三・四月には病勢かなり重かったのだから、ボープがこの老大家の風貌を瞥見したのは、彼十一歳の秋以前といふ事になる。そして、それは、彼自身ウィッチャリー（William Wycherley, 1640-1716）宛、一七〇四年十二月二十六日附の手紙に於て、

I was not so happy as to know him: *Virgilum tantum vidi.*

（余は不幸にしてドライデン氏の知遇を辱うする事を得ざりき、唯「この現代の」ヴァーギル「とも言ふべき人」を見たるのみ。）

と正直に告白して居るやうに、文字通りの垣間見に過ぎなかったけれども、彼の詩人的生涯にとって最も重大なインスピレーションの一つであった事は疑を容れない。

さて、ボープはスペンスに語って、

“I began writing verses of my own invention further back than I can remember.”

(自分が詩を作りはじめたのは想ひ起す事が出来ない程昔の事だ。)

と言つて居るが、今日『孤獨頌』(Ode to Solitude)と題されて居る詩の原形は十二歳頃の筆に成るものらしく、翌年頃には、フン族(Huns)の王アティラ(Attila)の侵寇からパリイを救つたため、その守護神と仰がるる「聖ジェヌヴィエーヴ」(St. Genevieve)を女主人公とせる悲劇を書き、十四歳頃には「サクセッシオ」(Successio)の作者エルカーナ・セトル(Elkanah Settle, 1648-1724)に寄する諷刺詩一篇を書いたが、「アルカンドー」(Alcander)と題する叙事詩を書いたのもこの前後のことらしい。この「アルカンドー」中の一對句

Whose honours with increase of ages grow,

As streams roll down, enlarging as they flow.

(その譽の積る月日と諸共に榮えゆくちま、

流るるままに擴がりゆく流水にさも似たり。)

ち た ひ 生

とふ二行は、後「批評論」(Essay on Criticism)の中(第百九十一・二行)に、また他の對句

As man's Meanders to the vital spring
Roll all their tides; then back their circles bring.

(人の世の羊腸たる河がその潮をば生の泉に巻き返し、
やがてまたその渦輪をば持ち歸るごと。)

は「ダンシヤッド」(*Dunciad*)第三卷の第五十五行—六行に保存され、餘は作者によって稿を焼かれた。

ポーブはウインザーに移轉早々、トランブル(Sir William Trumbull, 1633—1716)と非常に親しくなり、毎日のやうに一緒になつて乗馬を試みなどした。この老政治家は、隱棲に於て古典を読み且語る事が好きで、ポーブに對し「ミルトンに倣へ」²と激勵し、ポーブはまた彼にミルトンの青年時代の詩を読む事を薦めた。彼が、ウィッチャリーやウォルシュ(William Walsh, 1663—1708)と相識るに至ったのは、このトランブルの紹介によるものである。

ポーブが、その詩作上の指導方針を授かったウォルシュと相識ったのは、彼十五歳の頃の事らしい。この老人は元來ウスターシャ(Worcestershire)の富豪で、多少は近代風の詩も物